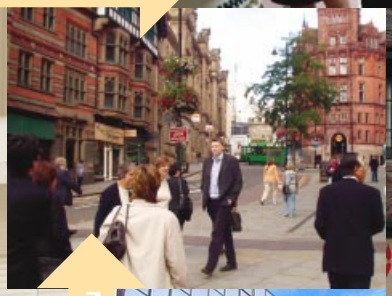
「まちの顔」が消えてしまう

近年、県内の多くのまちで、商業を取り巻く環境の変化や中心部の人口の減少などを背景に、中心市街地の空洞化が深刻化しています。このままでは、近い将来多くのまちからそのまちの「顔」と呼べるような場所が消えてしまい、長い歴史の中で育んできた固有の伝統や文化が失われてしまうかもしれません。本当にそれでいいのでしょうか。今回は、まちづくりについて改めて考えてみたいと思います。



特集1

「元気なまち」を取り戻す

中心市街地の再生に向けて――

衰退する中心市街地

中心市街地は古くから商業や教育、医療などさまざまな機能が集まり、農村社会を含む広域的な生活圏の中心として、地域経済の発展や豊かな生活の実現に大切な役割を果たしてきました。しかし、車社会の急速な進展や地価の高騰などを背景にした住居の郊外への移転、核となっていた大型店の相次ぐ撤退などにより、空洞化が進行しています。

郊外の大型店があれば大丈夫？

「郊外に便利な大型店があるから、中心市街地がなくなっても構わない」という意見もありますが、本当に問題はないのでしょうか。

郊外店ばかりになると、車を利用できる人には便利ですが、移動手段のない子どもや高齢者、障がい者の皆さんは、逆に不便な生活を強いられます。さらに、人が住み、暮らし、活動する要の場としての中心市街地の衰退が進めば、人と人とのつながりが薄れ、地域コミュニティーそのものがなくなる恐れがあります。これらは、まち全体の活力や魅力を失うだけでなく、その地域固有の伝統や文化といった大切な財産までをも失うことを意味するのです。

まちづくりの主体は

私たちが豊かで快適な暮らしを営むためには、その生活の拠点となるにぎわいと魅力あふれるまちが必要です。そして、中心市街地の再生を含めたまちづくりは、行政の取り組みだけでできるものではありません。そこに住む人たちやそこで事業を営む人たち、そこを利用する人たち自らが、その地域に愛着や誇りを持ち、その地域をより快適で魅力あるものにしようと考え、主体的に取り組むことが欠かせないのです。県内でも、住民の皆さんが主体となり、その地域の個性を生かしにぎわいを取り戻そうと取り組んでいるところがあります。そんな皆さんをご紹介します。

会津らしい風情を生かしたまちづくり

●七日町通りまちなみ協議会［会津若松市］

AIZUWAKAMATSU

かつてのにぎわいを取り戻したい

「まちを良くするとか、そんな大それたことは考えていませんでした。ただ、昔のにぎわいを取り戻したかった」。七日町通りまちなみ協議会の渋川恵男（ともお）さんは、まちづくりに取り組み始めた時の気持ちをそう話します。

失われた光景

会津若松市の中心部に位置する七日町は古くから市が開かれ、藩政時代から昭和30年代まで会津一の繁華街として大変栄えていました。しかし、今から十年余り前、子どもの時に町を離れていた渋川さんが、約30年ぶりに戻ってみると、そこには「様変わりしたまちの姿」がありました。空き店舗が目立ち、歩く人がほとんどいない「シャッター通り」になっていたのです。

キーワードは交流人口

渋川さんはこの状況を何とかできないかと、友人たちと活動を始めます。全国のまちを徹底的に研究するとともに、通りの建物を調査した彼らは、七日町に残る歴史的な建造物を生かし、会津らしい町並みを再生することで、にぎわいを創出する構想を描きます。活性化の鍵を交流人口と考え、商売の対象を地元の人たちから、他地域からの観光客などに切り替える大胆なものでした。

「昔のにぎわいを取り戻したかった。」

誰もがあきらめていた

ほとんどの人が時代の流れだから仕方がないとあきらめていた中、最初は誰も相手をしてくれなかったといいます。それでも、渋川さんたちは粘り強く働き掛けを続け、地域が一体となってまちづくりに取り組む気運を盛り上げていきました。

戻ってきたにぎわい

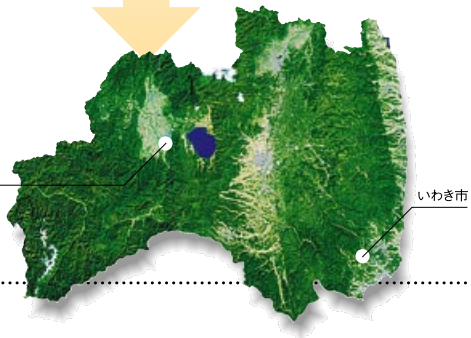
いま七日町には、会津の商業文化が息づく町並みの散策や買い物などを楽しみに多くの観光客が訪れます。一時は7割近くあった空き店舗も解消され、にぎわいが戻りつつあります。たった数人から始まった活動が大きな成果を生み出したのです。

紹　介

歩行者の滞留の場となるステージ付きの広場。骨董市や野外映画の上映など多くのイベントも行われています。
古い洋館風の七日町駅やレトロ調ボンネットバスもまちの雰囲気を高めています。
会津の商業文化が息づく町並みをつくりだすことで、20万人近くの観光客を集めています。

渋川さんは「世代を超えて誰もが訪ねたくなる魅力あるまちにしていきたい」と話します。

事例



音楽を通じて「街のにぎわい」を

街なかコンサート実行委員会［いわき市］

誰もが楽しめる音楽イベント

いわき市平地区は、昔から商業の拠点として、また、文化・教育・歴史の中心地として重要な役割を果たしているいわき市の顔です。ところが、他の地方都市と同じように、平地区にも空洞化の波が押し寄せています。街角に空き店舗が目立つようになり、若者が歩いていない寂しいまちになっているのです。そんな状況を何とかしたいと、地元で音楽活動をしているグループが中心となって、仙台市の定禅寺通りで行われている音楽祭をヒントに、街なかに人を呼び込み、にぎわいを創出して、参加者も観客も一緒に楽しめるイベントを実施しようと考えたのが、「いわき街なかコンサート」です。

ジャンルを超えてさまざまな人たちが参加

"コンサート"と名前はついていますが、音楽に限定されたものではありません。文化の発信地である平地区の特性を生かして、ダンスや大道芸、さらには、絵画や陶芸など多彩なジャンルで活動している人たちも巻き込んで行われています。平地区をまるで文化芸術祭のようにすることで、子どもから高齢者までさまざまな人たちが街なかを回遊しながら楽しめるイベントに仕上げているのです。

さらなる活性化には

「久しぶりに街なかににぎわいがあったので立ち寄りました」、「嬉しくて全部の会場を見て回ったよ」…

街なかコンサートに訪れた市民の皆さんからは多くの励ましの声が届きます。実行委員会の山本新一さんは、「このイベントがきっかけとなって、街なかを見直す動きにつながれば」とまちづくりの気運が高まることを期待しています。

「嬉しくて全部の会場を見て回ったよ。」

商店会の協力も得て、街なかのさまざまな場所がステージとなりました。
大道芸を真剣に見る子どもたち。みんなが楽しめるイベントです。
観客の皆さんは雨の中でも傘をさして立ったまま見てくれました。

IWAKI

「地元の思いは同じ、みんながまちを何とかしたいのです」と語る
事務局次長の山本さん

県の取り組み

県では、人と車が共生し、人と人とが触れ合う、にぎわいのある、新しい時代にふさわしいまちづくりを推進していきます。

「集う、商う、住まう」の観点からの支援

「**集う**」…中心市街地に公共公益施設を整備するとともに、周辺地域からのアクセスの確保を促進します。

「**商う**」…商業を活性化するため、中心市街地に商業の集積を図るとともに、商業の魅力向上を促進します。

「**住まう**」…中心市街地の居住人口を増やすため、住宅の整備など住みやすい環境の整備を促進します。

今年4月オープンの
福島学院大学駅前キャンパス（福島市）

「商業まちづくり推進条例」の制定

店舗面積六千m²以上の小売商業施設の新設を予定する事業者に対し届出を義務付けるものです。届出内容を基に県は立地場所の適否について判断をします。この他に地域貢献活動を促進する規定を盛り込んでいます。

歩行者を優先することで
中心市街地を活性化したノッティンガム市

「ふくしまの新しいまちづくりチーム」の設置

「ふくしまの新しいまちづくりチーム」を設置し、中心市街地の再生に成功した英国ノッティンガム市の視察の成果などを踏まえ、社会実験による検証などを行いながら、まちづくりのビジョンを提案します。

福島県知事
佐藤 栄佐久

「人」中心のまちづくりを目指して

深刻化する中心市街地の問題を放置すれば、高齢者や障がい者の皆さんの日常生活に不便を生じるほか、地域固有の伝統や文化が失われ、活力ある地域社会を維持できなくなる恐れがあります。

こうした状況を踏まえ、県では、昨年十月に大型店の広域調整と地域貢献を柱とする全国に先駆けた「商業まちづくり推進条例」を制定しました。

まちへの愛着や誇りを持って暮らしている人たちの生活を大切にしながら、新しい時代にふさわしい「人」中心のにぎわいのあるまちづくりができるよう、市町村や県民の皆さんとともに取り組んでまいります。

問 **県庁商業まちづくりグループ** ☎024(521)7290 HP http://www.pref.fukushima.jp/machidukuri/home/

発見 いいもの うつくしま

野菜編

「たらの芽」

山菜の王様といわれる「たらの芽」は、ほのかな苦さが春の到来を感じさせる食材です。収穫は、露地栽培では4月から、ハウスでの促成栽培は、露地ものより一足早い2月～3月にピークを迎えます。

天然のたらの芽はトゲがありますが、栽培用の品種「駒みどり」などは、トゲが少なく食べやすくなっています。

料理方法としては、天ぷらが定番ですが、和え物もおすすめで、ごま和え、ピーナツ和えなどでおいしくいただけます。若い方にはマヨネーズ和えなども好まれています。

問 **県庁園芸振興グループ** ☎024(521)7355

駒みどり